
あのそらのむこうがわ。（仮）

響月柚子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あのそらのむこうがわ。(仮)

【Nコード】

N1053Q

【作者名】

響月柚子

【あらすじ】

冴えない普通の男子中学生、柏木遥香。

特技といえば小さな頃からやっている弓くらいだった。

そんな彼がある日突然巻き込まれたのは、異世界の戦い…?!

モバゲー(E エブリスタ)より移動・大幅加筆修正。

若干の(エロ)グロ表現を含みます。苦手な方はご注意下さい。

・プロローグ・

部屋の中には沢山の蝋燭の灯りが、頼りなさげにゆらゆらと揺れていた。

その中心に、人影が一つ。

「…ごめんなさい」

薄暗いその部屋に、小さな声が響く。

床には巨大な魔方阵があり、淡い光を放っていた。

それに人影がゆっくりと手をかざせば、それは一際眩い光を放って、やがてすうつ、と消え失せた。

「…賽は投げられた。どうか貴方が、私を止めに来て下さい…」

人影は一人そう呟くと、灯り代わりにしていた蝋燭の炎を吹き消した。

・大きな暗闇が、辺り一帯を支配した。

「ふう……」

いつもの学校の帰り道、遥香は立ち止まると一つため息をついた。

かしわぎはるか

柏木遥香、14歳。

中学2年生。

勉強も運動も平均的で、容姿も並。

唯一の特技は小さな頃からずっと続けている弓くらいだった。

そんな平凡な彼の日常は、実に普通で退屈なモノだった。

そのためか、遥香は度々ため息をつく。

別に今の日常が嫌な訳ではないが、変わらない日常に少し飽きてしまっていた。

「……こんな気持ちじゃ集中出来ないや。今日は練習、休ませてもらう……」

いつも学校帰りに欠かさず行っている弓道場だったが、今日はやる気が出ない。

これでは他の練習生達に迷惑を掛けてしまう。

そう思った遥香は、今日の練習を休むことに決めた。

あと少しで家に着く。

家まで数メートルの距離に差し掛かった、その時。

突然眩い閃光が、辺り一帯を包み込んだ。

「……?！」

その余りの眩しさに、遥香は思わず目を強く瞑る。

——その次の瞬間。

遥香の身体はその光に包まれて、一瞬にしてその場から消え去っていた。

「う…ん…」

ゆっくりと瞑っていた目を開くと、そこは先程まで自分がいた住宅街とは、180度違う場所だった。

「…ここ、は…？」

辺りを見回せば、豊かな緑が目の前一杯に広がっていた。

見たことのない花や木が鬱蒼と生い茂っており、木々の隙間から太陽の光がうつすらと漏れていた。

「綺麗なところだなあ…」

自然は嫌いじゃない。むしろ、心洗われるようなそれらは、遥香にとって癒しの源だった。

ふわり、優しい風が遥香の長いエメラルドの髪をなびかせる。

それに遥香はしばしほう、と見惚れていたが、やがてある一つの重大な事実に気付き、慌てて手を自らの頭へと伸ばした。

「な、なな、何コレっ?!」

恐る恐る髪に触れば、さらり、と長い髪の感触が手を滑る。

もちろん遥香はこんな長く伸ばしたこともなければ、緑色なんて奇抜な色に染めたこともない。

平均的な中学男子の長さの、黒髪だったはずだ。

それが何故か、相当な長さで、しかも明るい緑色なんていう有り得ないものになっていた。

さーっ、と、身体から血の気が引いていくのがわかる。

直ぐ側にあった泉を覗き込めば、見知らぬ少女がこちらを見つめていた。

「こ、れは…っ?!」

泉に映る自分の（であろう）姿に、遥香は呆然と立ち尽くす。

…おかしい。絶対に、おかしい。

確かに自分は男にしてはまだ小さくて、よく女の子に間違われたりしていたが、今のこの姿は完全に女の子。女の子以外の何者でもなかった。

しかも髪は日本人にあるまじきエメラルド・グリーンで、瞳は深いブルーだった。

日本人離れしたその容姿は、最早遥香の面影を何処にも残していない。

「……」

遥香は信じられないその事実、一人混乱して頭を抱える。

「……あのー……」

そのためか、しばらく自分の他にその場に人がいることに、全く気が付いていなかった。

「……大丈夫ですか？」

「……っうわあああっ?!」

突然ポン、と肩を叩かれ、遥香は思わず悲鳴を上げた。

「な、なにっ?!」

いきなりの悲鳴に、声を掛けたその少女も驚いて声を上げた。

「…落ち着きました？」

「……ハイ……」

少女の問いに遥香は小さく頷き、恥ずかしさと気まずさに視線を地面へと落とす。

突然の少女の出現に酷く取り乱してしまった遥香は、何とか平静を取り戻すと同時に物凄い羞恥と申し訳なさで頭を一杯にしていた。何より、心配して声を掛けてくれた少女に対していきなり悲鳴を上げるなんて、何て失礼なんだろう僕は…！
冷静になった途端、そんな考えが頭を過ぎる。

「良かった…声を掛けたらいきなり叫ぶから、驚いたよ」

「す、スミマセン……」

本当に申し訳なくて、遥香は何度も頭を下げる。

それに少女が慌てた様子で首をブンブンと振る。

「そんなに謝らなくてもいいですよっ！ちょっと驚いただけですし、いきなり声を掛けた私も悪いですから…！」

「でも……」

どうしても納得出来ない。

ちゃんと謝りたい。

そう思った遥香は、少女の言葉にそう呟く。

その堂々巡りに、やがて少女は大きな声で遥香の言葉を遮った。

「もういいからっ！…それより、君は何故こんなところに武器も持たずに居るの？危険だよ？」

「…え…武器…？」

少女の口からさらりと出た物騒な言葉に、遥香は思わず自分の耳を疑った。

よく見れば少女の腰元には短剣が差しており、格好もどことなくR

PGゲームを彷彿させるような、現代にはない中世ヨーロッパのよ
うな服装をしていた。

「そ、武器。剣とか弓とか、何かないと魔物が出た時すぐやられち
やうし…」

「ま、魔物ツ…?!」

少女の言葉に、遥香は驚いて思わず聞き返す。

何処の世界に魔物、なんてモノが存在しているというのだろうか？

少なくとも、遥香の知っている現代日本には、いない。

しかし少女はそんな遥香の様子に気付いていないのか、そのまま話
を続ける。

「ほら、こんなところにいつまでもいると、魔物が来るよ！早く街
まで行こう！」

「えっ?! ちょ、ちょっと待って…!」

少女は思想的に置いていかれている遥香の腕を掴むと、そのまま歩
き出した。

それに遥香は驚いて抵抗するが、少女は女の子なのに意外と力が強
く、そのままずるずると引き摺られるようにして森の中を進んでゆ
く。

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね。私はアカネ。よろしく
ね」

少女はふいに立ち止まると、遥香の方を向き直る。

そして自らの名を名乗ると、ニコリと微笑んだ。

その動きに合わせてアカネの長い紫紺の髪が、風に揺れてふわりと
舞う。

(…か、可愛い…)

それに遥香は思わず見惚れてしまう。

しかしアカネはそんな遥香の様子に気付くはずもなく、遥香にも名
乗るよう促す。

それに遥香は慌てて口を開いた。

「え、と…僕は、柏木遥香です…!」

「カシワギハルカ？不思議な名前ね。ハルカって呼んでいい？」

「あ、はい…」

「あとその敬語！私苦手だから、やめてくれない？普通に話していいから」

「え、でも…」

出会ったばかりの、しかも恐らく年上の人に、いきなりタメ口なんて出来ない。

そう思い口を開くが、アカネはいいから！と少々強引に言っ、につこりと笑った。

二人は簡単な自己紹介を済ますと、森を進んでいった。

「……」

遥香の日常では到底見ることの出来なかった大自然が、どこまでも続いている。

それに遥香は思わずきよきよと辺りを見回してしまう。

「…？ハルカ、さっきからきよきよしてるけど、どうかした？」

「あ、えと…あの、僕のいたところとは随分違って、自然が豊かなあ、って思っ…」

「？」

遥香はその問いに、正直にそう答えた。

しかしアカネはそれに不思議そうに首を傾げる。

「ハルカ、君、何言ってるの？ここら一辺、皆こんな感じじゃない」「え」

さっきから全然、アカネと話が噛み合っていないかった。

ハルカは混乱する頭を何とか抑えながら、必死で考える。

そして、ある一つの結論に達した。

・もしかしたらここは、遥香のいた世界とは全く違う、“異世界”ではないのか、と。

「……」

退屈な日常。

いつの間にか心の奥底、どこかで願っていた、非日常。

けれど、いざその場面に出くわしてみれば、それはまだ若い遥香には背負いきれない程、重い。

「ハルカ…？」

「……アカネさん、僕…っ?!」

心配そうに覗き込んでくるアカネに口を開きかけたその時、その後ろに見たこともない巨大なモノが飛び出してきたのが見えた。

「危ないっ…！」

それが一体何なのか、それは遥香にはわからない。

けれど危険なことだけはひしひしと伝わってきて、遥香は思わずそう叫ぶ。

「…っ…！」

遥香の声にその存在に気付いたアカネは、一瞬で状況を理解し振り向いて腰の短剣を投げる。

『グアアーツ…!!』

するとそれは悲痛な断末魔を上げて、その場に崩れ落ちた。

「ハルカ、ありがと。おかげで助かったわ」

アカネは何事もなかったように、こちらに振り向く。そしてニコリと笑って、そうお礼を言った。

「…う…わ…っ」

「…ハルカ？」

ガタガタと、身体が震える。

それはどす黒い体液を流しながら、地面に横たわっていた。

アカネの投げた短剣が、まだ痛々しくその身体に刺さっている。

…怖い。

酷くこの世界が、怖かった。

本当に、この世界には魔物がいるのだ。

化け物が…！

「…大丈夫だよ、ハルカ。近くに村があるの。そこまで行けばもう、

魔物が出る心配もないから」

情けなく腰を抜かしぺたん、と地面に膝をつく遥香に、アカネは優しくそう囁いた。

「アカネ、さん……」

そしてぎゅ、っと、そのまま抱き締めてくれる。

温かい温もり、柔らかい感触。

安心するそれに、遥香はほっと息を吐く。

「もう大丈夫だから。村まで私が守ってあげる」

アカネはそう言って、優しく頭を撫でてくれた。

それは遥香を安心させるには、十分だった。

「……ありがとう」

涙が出そうになるのを抑えながら、遥香はそう呟いた。

辺境の村、ラセリア。

自然が豊かで、酪農や商いが盛んな村だが、今は過疎化が進み、少しだけ寂れてしまっている。

今も真つ昼間だというのに、人影は少なかった。

「ここがラセリア。私がお世話になっている村だよ」

「…わあ…！」

視界一杯に広がる木々、畑、そして動物。

のどかなその風景に、遥香は驚嘆する。

今まで自分が見てきた世界が、どれだけちっぽけなものだったか。

遥香はそれを改めて実感する。

「落ち着いて話したいし、私の家に案内するよ」

「あ、はい…！」

そんな遥香の様子を知ってか知らずかアカネはくす、と小さく笑うと、そのままスタスタと歩を進め始めた。

遥香は置いてかれまいと、慌てて後を追う。

漫画やゲームの世界のような、少し現代より未開発な気配が感じられる、不思議な世界。

よくある漫画や小説のような、巻き込まれ系ファンタジー。

そんな絶対有り得ないと思っていた事態が今、遥香の目の前に広がっていた。

「何もないとこだけど、ま、適当に座って。お茶でも用意するから」

「あっいえ、お構いなく…」

遥香が案内されたのは、村の奥隅にポツンと存在する、ちっぽけな

小屋だった。

一人で住むには十分の広さだとアカネは笑うが、しかし遥香は何となくその笑顔に違和感を覚えた。

「まーでも私居候の身だし、住む場所提供してくれただけで十分ありがたいよ」

アカネは慣れた手付きでお茶を用意しながら、ポツリと独り言のようになぞらえた。

「……え」

居候。

確かに耳に届いたその言葉に、遥香は大きく目を見開いた。

アカネはどう見ても自分と同年くらいの女の子だ。

まだ親に甘えていても全然おかしくない年齢のはずなのに。

そんな子が一体何故、こんな所に一人でいるのだろう…？

「さて、私の話よりも今は君の話を聞かなきゃ。君、何であんなとこに一人でいたの？」

そんな遥香の疑問に答えることなくさりと流して、アカネは遥香へと話題を移した。

「…え、と…」

何で、と言われても困る。

遥香にとっても突然のことで、自分でも全くわからないのだから。

「…わかんない？」

カップに注がれたお茶が、目の前にトン、と優しく置かれる。

それに視線を落として、遥香はこくりと小さく頷いた。

「…僕、こことは全然違う場所にいたんです…」

ポツポツと、独り言のように話し始める。

アカネはただ、黙って遥香の話に耳を傾けてくれた。

平和で退屈な世界。

毎日変わらない日常。

心の奥底で密かに目覚めた、異世界への憧れ。

それは自分でも気付かないうちに、日に日に大きくなって。
けれど実際見た憧れの”物語”^{せかい}は、漫画やゲームのように綺麗ではない。

生きるか死ぬかの、生命懸けの日々。

血生臭いようなことでも、アカネにとっては「当たり前」の出来事で。

あまりにも違う”世界”。

それにより導かれた答えは、自分は恐らく異世界に迷い込んでしまったのだろっ、ということだ。

「…よくわからないけど、君はこことは違う、どこか遠いところから来た、ってこと…？」

「…はい、多分…」

蚊の鳴くような声で、遥香は呟く。

「わかった。一緒に帰る方法、探そう？」

「…！」

アカネの言葉に、遥香はカップを見ていた視線をぱっと上へと上げた。

其処には、優しい微笑みを浮かべたアカネがいて。

ポロリと落ちる涙を、止められない。

「…もう、泣かないの」

「だ、って…っ」

見ず知らずの遥香に、ここまでしてくれるなんて、優しすぎる、から。

「私、これでも便利屋やってるの。だから、このくらい全然」

「でも僕、お金ないし…」

「いいよ、別に。私、困ってる人をほっとけないの」

アカネはそう言って、優しく頭を撫でてくれた。

「…本当に、いいの…？」

手掛かりも何のアテもない、もしかしたら一生見つからないかも知れないのに。

「…いいよ。これも何かの縁だし。それに、いつかはここを出て行
かなきゃ、と思ってたから」

長い髪を掻き分けて、アカネは言う。

「……っ」

その心強い言葉に、遥香は今まで何度となく感じた感謝の意を、再
び口にしていた。

「…そうと決まったら、早速仕度しなくっちゃ!」

「えっえっ、?!」

アカネはそう言うのと、ガタリと音を立てて席を立つ。

それに遥香は驚いて思わずそう言った。

だって、急過ぎるよっ!

「思い立ったら吉日! 準備してすぐに出かけるよ!」

しかしアカネはそう言うのと、楽しそうに笑う。

その活き活きとした様子に、遥香はただ呆然と流されることしか出来なかった。

「…本当に良かったの?」

数時間後村を出た遥香は、先を歩くアカネにそう尋ねた。

「何が?」

見ず知らずの人間と、出会ったその日に旅に出る。

普通だったら絶対嫌な状況だろうに、アカネはきょとんと、不思議そうな顔をした。

「何が、って…僕と旅に出たことだよ! 素性のわからない人間と…しかも、慣れ親しんだ村を簡単に出るなんて…っ」

村を出る前、アカネは村民達に簡単な挨拶をしてくる、なんて言うて、一旦家を出て行った。

十数分後彼女が戻って来た時には、両手一杯に饞別の品々が抱えられていた。

「もう、皆ったら荷物になるって言ったのに」

そう言うって苦笑いするアカネだったが、それはそれだけ彼女が村民

達に慕われていた証拠だ。

そんな簡単に村を出ることを決めてしまつて、本当によかつたのだらうか…？

「…やっぱり僕一人で…っ」

今からでもまだ、遅くない。

そう思い、遥香はそう切り出す。

遥香と違つて色んな人間に慕われる彼女を、巻き込みたくなかつた。

「…今更何言つてんの？いつ私が迷惑つて言つた？―それに、これは私自身で決めたことだよ。君に同情したから、なんて、簡単な理由じゃない」

「…アカネさん…」

「言つたはずだよ。いつかは村を出なきゃ、つて思つてた、つて」
そう言えばそんなことを言つてた気がする。

居候の身、なんだっけ？

事情はよくわからないけど、もしかしたらアカネは村に居づらかつたのかも知れない。

(…その割には随分餞別もらつてたけど)

「さてっ、と。この話はもうおしまいつ！早く行かないと日が暮れちゃうよ！」アカネは仕切り直すようにそう言つと、歩を早めた。

「あ、うん…待つてアカネさん…！」

ともすれば置いていかれそうなそれに、遥香は慌ててその後を追つた。

―こうして、彼らの旅は静かに始まりを告げた。

この二人だけの小さな旅の始まりが後に世界を救つたための旅にまで発展するとは、この時の彼らが知る由もなかつた。

<第一部・了>

— 間章 —

「…ボクは絶対に、貴方を許さない」

「……」

薄暗い室内に響くのは男とも女ともわからない、綺麗なハスキーボイス。

「これは、ボクと貴方の問題でしょ。…皆を、特に彼を巻き込むのだけは、絶対に止めて」

敵意を剥き出しにしたソレは、けれど彼女には届かない。

黒いフードを目深に被ったその人は、あくまで無言を貫く。

「…話にもならない。だからボクは、貴方が嫌いなんだ」

はぁ、というため息と共に、吐き出すように彼は呟く。

ゆらり、何処からか風が吹いて、蝋燭の炎が揺らぐ。

「…私と貴方は相容れない。―それはもう、貴方もわかっているのでしょう?」

「……」

今度は流暢に話していた彼が、沈黙に包まれる。

もう二人の間に、何も会話は生まれなかった。

ラセリアを出た二人は、紆余曲折はあったものの無事に次の街に着いていた。

「うわぁ…」

工業の街、トリメスタ。

科学製品が特産なこの街は、科学者や研究者が多い。

最先端技術を駆使して作られた町並みは、整備されていてとても美しい。

まるで漫画やアニメの中の近未来のようで、遥香は感嘆の声を上げた。

「トリメスタは工業が盛んなの。全国で販売されてる製品の半数以上が、ここで生産されてるって話」

「そうなんだ！すごい街なんだね」

アカネから街の概要を聞いた遥香は、きょろきょろと落ち着きなく回りを見渡しながら、そう答える。

見るものが全てが珍しくて、次々とアカネに質問していく。

「あれは何？あ、こっちは？うわぁ、すごいっ！」

無邪気にはしゃぐ遥香に、アカネは笑いながら相槌を打ってくれる。まるで観光でもしてる気分だった。

（そんな呑気なこと、してる場合じゃないんだけど…）

この世界が、あまりにも遥香のいた世界と違うから。

（…なんて、アカネさんに悪いよね）

遥香のために旅を始めてくれたのに、その遥香がお遊び気分では悪いと思う。

出店に並ぶ品々を見ながら、ふう、と小さくため息を吐く。活気ある街路とは対照的に、遥香の気分はどんよりと曇っていた。

「…どうしたの？」

「！ううん、何でもない！」

急に大人しくなった遥香に、アカネは心配そうに顔を覗きこんでくる。

それに大丈夫、と笑いながら、遥香は再び出店へと視線を向けた。科学製品を出店で売るなんて、珍しいなあ…ていうか文明レベルと技術レベルが合っていないような気が…

「あら〜？」

遥香が世界の矛盾に想いをはせていると、何やらその場にそぐわない間の抜けた声が響いた。

「？」

思わず声の方に視線を向ける。

「……っ」

すると、それはそれは美しい容姿をした女性が、屈強な男達に囲まれていた。

白い肌、光り輝く青み掛かった銀髪、羽衣のようにゆったりした服、そして何より、背中に生えた真っ白な両翼。

それは遥香が昔好きだった天使、そのものだった。

「嘘…天使だ…信じられない」

アカネが呆然と呟く。

どうやらアカネにとっても珍しい種族だったらしい。

食い入るように見つめる視線の先には、しっかりと声の主が収められている。

「あああら〜？皆さん、どうしたのかしら？」

…当の本人は全く持って気にしていないようだったが。

「どうしたのかしら？…って、随分と呑気な天使だな」

「…どうする？」

男達は半ば呆然と、けれど包囲網は保ったまま、互いを見合う。

それを見て、遥香はさっきから感じていた小さな違和感の正体を悟

った。

「あの、アカネさん…何であの人達、女の人を囲んでるの？」

「…それは…」

アカネは言い辛そうに空を仰ぐ。

「……？」

アカネのこんな表情は、短い時間ながら今まで見たことがない。それに一抹の不安を感じながら、遥香は黙って続きを促した。

「天使はね…畏怖の象徴なの」
アカネは小さくそう呟く。

畏怖。

天使とかけ離れたその言葉に、遥香は思わず小首を傾げた。

遥香の世界で天使といえば、神の使いであったり、キューピッドであったり、とにかくイメージ的にはとても清らかで美しく、恐ろしいというイメージはあまりない。

それに目の前の天使はのほほんとしていてのん気に見えて、とてもそんな風には見えない。

「昔から世界を”管理”しているって伝説があつて…こうして会えるだけでも、かなりすごいことなんだよ」

遥香の様子を知ってか知らずか、アカネは尚も興奮気味に続ける。

世界を”管理”する種族…遥香にはよくわからないが、この世界ではどうやらすごい種族らしい。

そんな人達なら、遥香を元の世界に戻すことも出来るかも知れない。ぼんやりと其処まで考えて、ハッと我に返る。

（あの人なら、僕を元に戻せるかも…！）

元の世界とまではいなくても、元の姿―男には、戻れるかも知れない。

馴れない世界に、馴れない身体。

―どちらを優先すべきかは、明らかだ。

（それにこの姿のまま元の世界に戻っても困るし…）

「…ハルカ？」

アカネが心配そうに声を掛けてくる。

それに何でもない、と返しながら、遥香は更に考えを巡らせる。

（…でも、どうすれば…？）

チラリ、と、天使の方を盗み見る。

「…あら〜？」

すると天使を囲んだ男達が、ゆっくりとその包囲網を狭めているのが見えた。

（助けなきゃ…！）

気付くと遥香は、無意識に飛び出していた。

「ハルカ?!」

後ろからアカネの焦った声が聞こえたが、構わず突き進む。

「なんだ…?!」

「ちょ、押すなって…!」

いきなり乱入してきた遥香に、男達は驚いて道を開ける。

「大丈夫ですか？」

「あら〜、ありがとう〜」

半ば強引に割り入ってそう声を掛けると、緊迫感の欠片もない言葉が返ってくる。

それに若干肩透かしを食らいながらも、遥香は天使の手を取った。

「ここは目立ち過ぎます。とりあえず街を出しましょう。…アカネさん、行こう」

「へっ?!う、うん…!」

観衆から逃げるように、郊外へと駆け出す。

「…?」

パタパタパタ。

するとしばらくして、羽音みたいな軽い音が間近で響いた。

それと手を引いていたはずの右手が妙に軽いことに気付いて、遥香は思わず振り向く。

「うわぁっ…?!」

次の瞬間目に入った信じられない光景に、思わず素っ頓狂な声を上

げた。

「あら？私、どこか変かしら？だって、飛んだ方が楽でしょう？」
天使はそんな遥香の反応に、不思議そうにそう尋ねてくる。

「いえ…私達には羽根がないので、それはちよつと…」

脳の処理能力がとくにオーバーヒートしてしまった遥香の代わりに、アカネがそう答える。

「―あら？あらら？」

言われて初めて気付いたのか、天使はとても珍しそうに二人を交互に見た。

「まあ、人間さんでしたの？珍しい」

…それは、遥香達の台詞だった。

「あのう…天使さん？」

「マナですわ」

「…マナさん、ここ、何処だかわかってます？」

恐る恐る、アカネは尋ねた。

「？天界そらじゃありませんの？」

（この人、かなりの天然だっ…！）

天使―マナの答えに、遥香はもちろん、アカネも絶句せざるを得なかった。

「まあ、どうしましょう？私、どうやってここまで来たのかしら？」
「……………」

どうやらこの天使…マナは、かなりの天然らしい。

「あの…マナさん？その…天界^{そら}って…地上^{こち}から行く方法あるんですか？」

ようやく落ち着いてきた遥香は、恐る恐るそう尋ねた。

「……、わからないわ」

遥香の問いに、マナは少し考えてからそう答えた。

わからない。

それは、今の遥香と同じ状況だ。

ある日突然、見知らぬ世界に飛ばされてしまう。

自分のいた当たり前の日常から知らない非日常へと変わるその恐怖を、遥香も知っている。

(…助けてあげたい)

自分の立場も忘れて、ただそう思った。

「…マナさん」

意を決して、遥香は話し掛ける。

「なあに？」

相変わらずふわふわとした受け答えが返ってくるが、怯まずに続ける。

「僕達と一緒に、来ませんか？」

「ハルカっ?!」

突然の遥香の言葉に、アカネが驚いてこちらを見る。その瞳には驚きと焦燥の色が浮かぶ。

「僕も、貴方と同じような状況なんです。もしかしたら、旅の中で帰る方法が見つかるかも知れない。…それに、一人より二人の方が心強いでしょう?」

捲し立てるようにそう言つて、遥香はにこりと微笑んだ。

「……」

マナは少し考えるように唇に手を当てて、そしてとても嬉しそうに笑った。

「ご一緒してもいいかしら?」

「もちろんです!」

マナの答えに、遥香はそう即答した。

「ちよっ…私の意見は…?!」

二人だけで話を進める遥香とマナに、アカネは思わずそう叫ぶ。

「あ、すみません…!」

遥香はそうだった、と、アカネに向き直る。

「アカネさんも、いいよね?」

真摯な瞳に真っ直ぐ見つめられて、アカネは早々に折れることになる。

「……べ、別にいいけど、さ…」

「ありがとう!」

アカネの答えに、遥香はとても嬉しそうに微笑んだ。

「…うつ…」

—この笑顔には、勝てない。

キラキラと輝くようなそれに、アカネは内心そう思った。

「これからよろしくお願いします、マナさん」

「はい」

そう言っで楽しそうに笑う遥香とマナに、前途多難な旅になりそうだと、アカネは一人ため息を吐いた。

―間章2―

「君は本当に、それでいいんだね？」

豪華絢爛。

そんな言葉が似合う、世界最大級の王城の謁見の間。

煌びやかな装飾と真っ赤な絨毯が、長い廊下を彩っている。

その再奥にある大きな椅子に腰掛けた初老の男性が、諭すように静かに、そう尋ねる。

「……はい」

椅子の前に跪く青年が、それにはつきりとそう答えた。

「……わかった。君が其処まで言うのなら、私はもう何も言わない。

……これを」

傍らで控えていた兵士の一人が、彼の指示を受け青年に薄い紙と麻袋を手渡す。

それに青年は深々と頭を下げて、それらを受け取った。

「ありがとうございます、王様」

「うむ。……くれぐれも無理をしないようにな」

青年はもう一度深々と頭を下げ、そして謁見の間を去っていった。それを見送って、王はゆっくりと立ち上がる。

「……武運を祈っている」

小さく呟かれたそれは、青年には届かなかった。

「…とりあえずマナさん、これ着て下さい」

「あら、ありがとう」

目立つ羽根を仕舞わせようと、遥香は出店で売っていた上衣を手渡した。

「その羽根、目立ちますからね」

「そうね…でもこれ、仕舞えるのよ？」

「え」

そう言うてにつこりと笑うマナは、そのまま背中 of 大きな羽根を瞬時に消した。

（…なら最初から隠してれば、あんな騒動にはならなかったのに…！）

遥香は思わずアカネへと視線を向ける。

すると、彼女とばかり視線が重なる。

しばらく無言で見つめ合うと、アカネはふるふると黙って頭を左右に振った。

（…気にしたら負け、ってことか…）

そう思い、遥香は思わず苦笑いを浮かべた。

「それじゃ皆さん、これからどうしましょうか？」

一人楽しそうなマナは、ニコニコと微笑みながらそう尋ねてくる。

それに助けを求めるようにアカネへと視線を移すと、困ったように笑い返してくる。

「うーん…どうしよつか。とりあえずこの国で情報収集して、それから近い国回ってみる…？」

この世界の土地勘があるのは唯一、アカネだけだ。

そのアカネの提案に、遥香はもちろん、マナが反対するはずもない。
「そうね」

「うん、僕も賛成」

「…それじゃ、決まりね」

アカネは二人の返事を聞いて、うん、と頷く。

次の目的地も決まったことだし、早速行動すべきだろう。

三人は誰からともわず、ゆっくりと歩き始めた。

まずは情報収集。

話は、それからだ。

遥香達はトリメスタに戻ると、街中を闊歩して情報を集めていった。

「何、天界への行き方？そんなの、分かる訳ないだろう」

「チキユウ？ニホン？ごめんなさい、わからないわ」

「身体の不調が治るもの？知らないねえ…寧ろ、俺が知りたいよ」

「……」

分かつてはいた事だが、現実には遥香にとって厳しかった。

天使のことも、遥香の故郷のことも、身体のこと、何一つ分からない。

…まあ流石に遥香の状態をそう易々と説明する訳にもいかず（まあ言っても信じてもらえなさそうだが）、曖昧な表現に変えている。まだ身体の事については、二人にも詳しくは話していない訳だし。その所為か、先程尋ねた人には「俺が知りたい」とまで言われてしまった。

しかもその後、何処か調子が悪いのか、と二人に心配されてしまった。身体のこととはそれ以上聞けなくなってしまった。

…ちなみに、マナには既にそれとなく聞いてみたが、天然天使に通じるはずもなかった。

「やっぱり、そう簡単にはいかないか…」

アカネはうーん、と伸びをしながら、思わずそう呟く。

天界への行き方も遥香のいた場所のことも、普通の人間は知らないだろう。

特に前者は、皆に周知の事ならとくに天使達が捕らえられて、研究されているはずだ。

それがないということは、一般には知られていない、ということだ。それにここは、工業の街である。

産業こそ盛んであれ、種族の研究には疎いだろう。

「…何処か、民族の研究してる街とか入って、ないのかなあ…」
せめて、手掛かりだけでも掴みたい。

そう思い、遥香は思わずそう呟く。

「種族研究、か…」

アカネはそう呟いて、そのまま考え込むように顎に手を当てる。
何か心当たりでもあるのだろうか？

「考えてても仕方ないか…今日は宿に泊まって、次の街へ行く」
アカネはしばらくそうしてから、ぱつと顔を上げる。

「え…う、うん。マナさんも、それでいい？」

「ええ」

何か様子が、おかしい。

そう思いながらも、遥香は何も言えずに頷く。

「私、宿って初めてなのよ。楽しみだわ」

マナはそんな微妙な空気に気付かずに、楽しそうに微笑んだ。

「こちらがお部屋の鍵でございます。ごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます」

情報収集を一通り済ませた遥香達は、束の間の休息を楽しんでいた。

「はぁー…つかれたぁ！」

宛がわれた部屋に辿り着くなり、アカネはソファにどかりと腰を落とす。

「まあ…これがお部屋なのね」

マナは物珍しげに辺りをきょろきょろと見回しながら、嬉しそうに呟く。

「……」

そんな二人を尻目に、遥香は気付かれないように小さなため息を吐いた。

皆、マイペース過ぎる。

かくいう遥香も初めての経験だったから、内心興味津々ではあったが。

(…それにしても)

ツインルームに三人で泊まる。

無謀過ぎるそれは、けれど路銀の少なさからすれば仕方のない事だ。遥香とマナはこの世界のお金を持っていないから、実質アカネのポケット・マネーを頼りにせざるを得ない。

アカネは以前何でも屋として働いているから多少の余裕はあるものの、それも何時までも持つものではない。

何とかお金を稼ぐ方法はないものか、と、遥香は一人物思いに耽る。「ふかふか〜」

そんな遥香を知ってか知らずか、マナはベッドに寝転びながら嬉し

そうに微笑む。

無邪気なその言動は、とても年長者には見えない。

(…ていうか、年上……だよね?)

果たして天使、という種族が、人間と同じ時の流れで年齢を重ねているかは不明だが、少なくとも遥香やアカネよりは年上のはずだ。

…しかしその言動は、とても頼れるようなものではないが。

「……僕が頑張らないと、かな……」

遥香は生まれてこの方、まだ働いた事等なかったが、今は必要に迫られている。

自信はないが、どうにかするしかないだろう。

「アカネ、相談があるんだけど」

ソファに身体を預けるアカネに、そう声を掛ける。

「ん?何?」

不思議そうにこちらを見上げるアカネに、深呼吸一つ、言葉を紡いだ。

「僕に、仕事を教えて下さい!」

「……そっか」

一通り事情を説明すると、アカネはそう呟いてそれきり黙ってしまった。

サバサバしていてイエスノーはつきりしているアカネが、こんなに返答まで時間が掛かるなんて珍しい。

「あ、あの……アカネ?」

恐る恐る、そう声を掛けてみる。

「!ご、ごめんねハルカ、私でよければ力になるよ!」

「う、うん……ありがとう」

我に返ったのか、アカネは明るくそう言って笑う。

けれど何処か引つ掛かるそれは、遥香に小さな不安を与える。

「ささ、もう今日は寝ようか！ マナさんももう、寝ちゃってるしね」
「…そう、だね…」

隣のベッドを見ると、既にマナはすうすうと静かな寝息を立てていた。

遥香はそれを確認してぎこちなく笑うと、自分のベッドに潜り込む。けれど、一向に眠気は訪れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1053q/>

あのそらのむこうがわ。（仮）

2011年10月14日02時01分発行